

とした。組織所見では明瞭な核小体を持つ小円形細胞腫瘍で、免疫組織化学的には神経原性の腫瘍の性質を示し、電顕では胞体内に神経分泌顆粒を有しており PNET と診断、二期手術で腫瘍全摘を行ない、現在、化学療法その他、照射療法を併用し経過観察中である。

24) 当科で経験した小児若年性ポリープ 8 例の検討

小幡 和也・山際 岩雄
畠中 康晴・鷺尾 正彦 (山形大学第二外科)

山形大学第2外科では8例の小児若年性ポリープを経験し、このうち6例が最近1年間の症例である。年齢は生後2カ月から6才におよび、男児3例、女児5例である。初発症状は肛門出血が6例、他疾患にて注腸造影施行時に発見した1例、腸重積の先進部が1例であり、肛門出血例中1例はポリープが肛門外に脱出し来院した。発生部位は空腸1例、横行結腸1例、S状結腸3例、直腸3例であった。治療は5例に内視鏡的ポリペクトミーを行い、うち1例は巨大にて不成功に終わり開腹摘出した。1例は腸重積手術時に切除、残る2例は肛門外に脱出したポリープを結紮切除した。肛門出血例では病期期間が長く積極的に注腸造影や内視鏡を行うべきである。

25) 再発乳癌の治療経験

田島 健三・佐藤 政
若菜 隆二・高橋 昌 (長岡赤十字病院)
新田 幸壽・和田 寛治 (外科)

当科で11年間に経験した乳癌症例373例中、治癒切除再発生存例は11例である。これら11例に対してホルモン療法、化学療法、照射および局所切除などの合併療法を施行し、効果がみられたのでその治療経験についてのべる。

症例1は stage III の男子乳癌で、術後3年目に縦隔リンパ節転移を来し切除したが、その後肺転移と骨転移を認めため MPA 1200mg/日投与したところ転移巣及び胸水の消失を認め再発後5年6カ月の現在生存中である。そのほか4例に MPA を併用した合併療法を行ないうち2例で3年以上生存している。また対側乳房、卵巣に転移を来したため両者を切除し、アドリアマイシン投与を行なったところ5年5カ月再発なく生存中の1例も経験している。他の例も CAF 療法, TAM 投与にて生存中である。

以上再発乳癌に対し積極的に治療すれば延命出来る例

があることを経験した。

26) 悪性腹膜中皮腫の2症例における石綿暴露の検討

佐藤 鍊一郎・師岡 長
福田 喜一・大川 彰 (秋田組合総合病院)
粕谷 孝光 (外科)

悪性中皮腫と石綿との関連は夙に指摘されているが、腫瘍そのものにおける石綿を検索した報告は腹膜中皮腫に関しては見当たらない。我々は悪性腹膜中皮腫の2例に於て石綿線維及び石綿小体の検索を行い、以下の知見を得た。

1. 症例1の大網腫瘍に於て対照群に比し石綿線維及び石綿小体が有意に多数認められた。
2. 症例2の大網腫瘍中の石綿線維及び石綿小体は対照群に比し有意差はなかったが、シリカ線維が大量に認められた。

近年石綿使用量は急激に増加して来ており、石綿及びその代替品に対する対策が更に強化されることが望まれる。

27) 外傷性外肛門括約筋損傷に対する sphincteroplasty の1症例

島村 公年・滝井 康公
酒井 靖夫・藍沢喜久雄
畠山 勝義・武藤 輝一 (新潟大学第一外科)

外傷性の外肛門括約筋損傷による機能不全に対し、overlapping sphincteroplasty を施行し、良好な結果を得たので報告する。

症例は28歳の男性。平成1年6月、交通事故にて会陰部損傷し、sigmoidostomy が造設された。肛門括約筋の随意収縮は認めるものの、 $12^{\circ} \sim 3^{\circ}$ に筋収縮はなく、肛門管静止圧、随意収縮圧はともに極めて低値を示した。手術は電気刺激を用いて捜し求めた外肛門括約筋の断端を遊離した後、約2cm程 overlap させ縫合した。手術後、括約筋の収縮は全周性となり、肛門内圧検査でも明らかな改善を認めた。sigmoidostomy も閉鎖し、現在、1日排便回数3~4回、soiling もなく、経過良好である。